

「解放」後、ケシ栽培復活

ペシャワールから

沖繩へ

中村 哲

5

「沖繩ピースクリニック」

建設中のアフガニスタン東部山岳地帯、クナール州の山奥にある。ペシャワールからジープで三日、ひどい自動車道が一応あるが、慣れてないと、ここへ道を車が激しくゆれて大変だ。

PMS(ペシャワール会医療サービス)では、この渓谷に一九九二年以来診療所を開き、住民たちの診療に当たってきた。アフガニスタンの山村部はほとんどが無医地区と言つてさしつかえない。かつて病気になる住民たちは、はるばる下手のジャララバードやペシャワールまで降りていた。外国人はほとんど入ら



ず、たまに国連、赤十字、米軍の車両を見かけるが、大抵は何か事が起きたときだけである。

診療所の存在は、人々に安心感を与え続けてきた。同州南部のニンクラハル州では半ばつが猛威を振るっているのに、この地域はヒンスクック

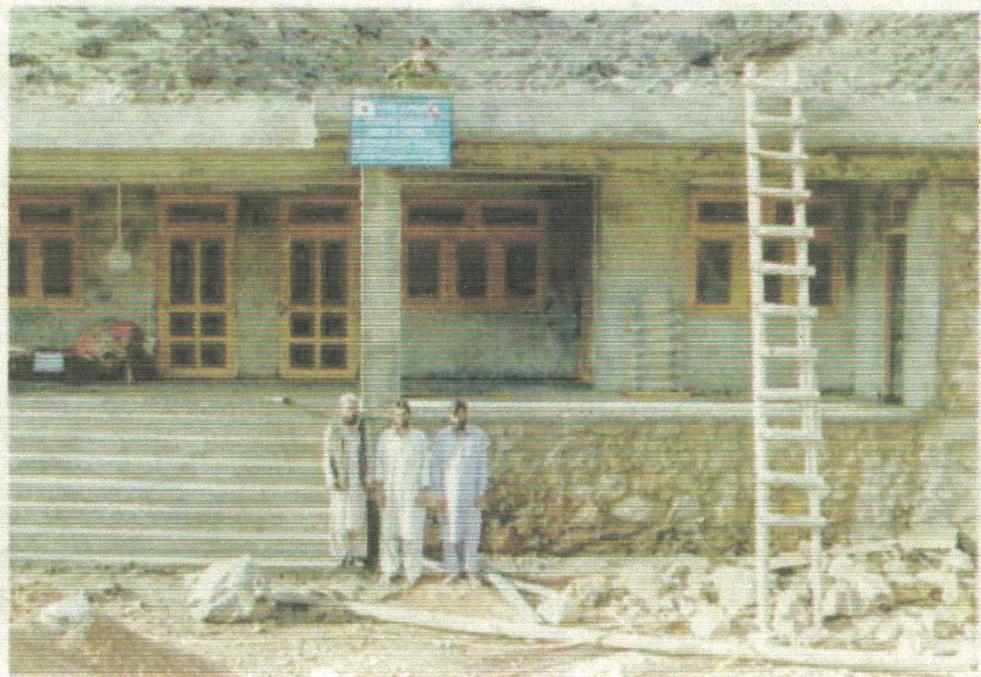
最前線の中の診療所

シユ山脈最高峰から流れ出る雪解け水が豊富に潤し、一見豊かに見える。しかし、完結した自給自足を営む農民たちは現金収入が乏しく、病気になることも下流の都市に行く、バス賃や薬代を払うゆとりがない者が多い。半日、一日かけて徒歩で診療所にくる患者は珍しくない。

最近、この地域で厄介なのが、ケシ栽培の爆発的増加と、米軍の無意味な活動である。九六年から二〇〇一年まで続いたタリバン政権の統治は、ケシ栽培を全滅に追い込んでいたが、米軍の「アフガン解放」とともに盛大に復活した。春ともなれば、豊かな小麦畑の半分以上が妖(あや)しく色鮮やかなお花畑で埋め尽くされる。麻薬の生産は、この一年で十四倍に増

加、アフガニスタンは不名誉な「世界最大の麻薬供給国」に転落してしまった。国連が「刈り取り報奨金」を出すと、それを当てにする農民がますますケシを作る。最近では米軍が除草剤らしきものをヘリコプターから散布し、それで死亡者が出るありさまである(米軍当局は否定)。また、米軍はクナール州をタリバンに反米活動の温床地と見なし、このところ軍事活動を強めている。

だが米兵襲撃、駐屯基地へのロケット砲攻撃が後を絶たず、米軍は地上移動をほとんどしなくなった。敵を識別できず、米兵は疑心暗鬼にさいなまれていく。「悪のタリバン」とは、実は大半が普通の真面目なアフガン農民そのものである。



アフガン東部の山岳地帯に建設中の「沖繩ピースクリニック」＝アフガニスタン・クナール州

兵は怖がつて通らない。PMSの活動は何事もなく続けられている。まず生きることだ。実際、沖繩ピースクリニックのあるシンサイ村ではケシ栽培を控えているし、用水路建設には反タリバン兵、元タリバン兵、新旧の政府関係者らが、政治的立場や敵対を超えて協力している。これは、最低限の福祉と生活が保障されれば、ケシ栽培も内紛も避け得ることを実証している。

強引な「搜索活動」や、検問を通過した農民が射殺されたり、誤爆による殺傷で住民のひんしゆくを買った。それに、最近では、味方であるはずの「反タリバン」の山岳民族・ヌーリスタン族まで敵に回して收拾がつかなくなり、米軍ヘリコプターが超低空で通過していた。おまけに、道路脇の岩盤の破砕に一日数十発の爆破が行われるので、米

野蠻な軍事活動に沖繩県民の「平和のメッセージ」を対置すべく、ピース・クリニック建設が計画されたのだが、意に反して、奥地で我々の車両の日の丸を見ると米兵はほつとすのだという。診療所から帰る途中、すれ違った米兵が笑顔で挨拶をした。帰国して、米兵の暴行事件を聞き、何だか複雑な気分である。確かに、沖繩では米兵が襲撃されることはない。(医師・ペシャワール会現地代表)

敵味方ない「沖繩ピースクリニック」地区

「ペシャワールから沖繩へ」は毎月第4日曜日に掲載します。